

サムエル記下 21 章 15～22 節

2025 年 12 月 10 日(水)

はじめに

本日はサムエル記下 21 章 15～22 節を学びます。この部分は 21 章 1 節～24 章 25 節に含まれていますので、まず全体を展望してみましょう。話の大筋は、箇条書きにすると、以下のようになります。

- ①21 章 1～14 節ダビデ治世下の大飢饉
- ②21 章 15～22 節ペリシテ人との戦い
- ※22 章 1 節～23 章 7 節ダビデの感謝の歌と最後の言葉。
- ③22 章 8～38 節ダビデの勇士たちの紹介
- ④23 章 1～25 節ダビデの人口調査という罪

ご覧のように、※の 22 章 1 節～23 章 7 節のダビデの感謝の歌と最後の言葉を中心にして、ダビデ王の治世下での四つの出来事が語られているわけです。ダビデ治世下の大飢饉、ペリシテ人との戦い、ダビデの勇士たちの紹介、そしてダビデの人口調査という罪が語られています。これらは時系列的に起こったというよりも、ダビデの感謝の歌と最後の言葉との密接な関連で理解すべきものと思われます。

さて今回は①を学び、本日は②の 21 章 15～22 節という記事を学びます。なお、新共同訳小見出しでは、「対ペリシテ戦における武勲」となっていますが、果たして、聖書は「武勲」なるものを語っているのか。その点がきわめて疑問です。

I サムエル記下 21 章 15～22 節の話の流れ。

そこでサムエル記下 21 章 15～22 節までの話の流れを見てみましょう。

注目すべきは、第一に、ダビデ治世下のペリシテ人との戦いの記事なのに、ダビデ軍とペリシテ軍の戦の有様を語っていないことです。戦いは数度行われました。「ゴブの地＝ゲゼル」での戦闘(18、19 節)、「ガト」での戦闘です(20 節)。しかしその都度、ダビデ軍の兵士がペリシテ人の強者を打ち倒したことがいわれているだけなのです。

第二に、その強者のペリシテ人は、繰り返し「ラファの子孫の一人」(16、18、20、22 節)といわれています。つまり「巨人」を倒した、とっているわけです。しかしこれは、一体、何を告げているのか。以上のことを念頭にして記事全体を見えます。

①まず 15～17 節です。ここではダビデがペリシテ軍と戦った記事です。ダビデは王として最前線に出て戦う人です。しかしここでは「**ダビデは疲れていた**」といわれています。つまり、おそらく老化のため、戦う力が失われているということです。そのようなとき「**ラファの子孫の一人イシュビ・ベノブ**」という巨人が、ダビデを討つといって登場します。そこでダビデの姉ツェルヤの子アビシャイが、ダビデに代わって、イシュビ・ベノブと戦い、勝利します。この時、アビシャイはダビデに対して「**以後、我々と共に戦いに出てはなりません。イスラエルの灯を消さぬよう心掛けてください**」といっています。こうしてこれ以降、ダビデに代わって、ダビデ軍の兵士が巨大な敵と戦い、勝利したといわれるのです。

- ②18 節。ここでは「ゴブの地」での戦闘が語られています。ここでもフシヤ人シベカイが「ラファの子孫の一人」サフに勝利したと述べています。
- ③19 節。ここも「ゴブの地」での戦闘です。ベツレヘム出身のヤアレ・オルギムの子エルハナンが、「ラファの子孫の一人」であるガド人ゴリアトに勝利しています。
- ④20～21 節。ここでは「ガト」での戦闘が語られています。ここでは、ダビデの兄弟シムアの子ヨナタンが、「ラファの子孫」で手足の指がそれぞれ六本ある者を打倒しています。
- ⑤22 節。こうして結びでは、ダビデとその家臣が、ガトにいた四名の「ラファの子孫」を打ち倒したと、まとめて語っているわけです。

以上のように聖書は、ダビデ治世下でのペリシテ人との戦いを戦記もののように語る意図はありません。ダビデ軍が何名であり敵方のペリシテ軍が何名であって、どのような戦場で、どのような作戦で戦ったのかについて語るつもりはないのです。むしろ疲れたダビデに代わって、ダビデ軍の兵士が「ラファの子孫」の 4 名を倒したことが語られているわけです。いわばダビデの代理人として戦い勝利したということが強調されているわけです。

では、「ラファの子孫」とは何者なのか、ということです。それを考える上で参考になるのが、かつてイスラエルの民が「約束の地カナン」を偵察したときのことで、偵察隊は次のように報告しました。「我々が見た民は皆、巨人だった。そこで我々が見たのは、ネフィリムなのだ。アナク人はネフィリムの出なのだ。我々は、自分がいながらのように小さく見えたし、彼らの目にもそう見えたにちがいない。」そのように述べています。民数記 13 章 32～33 節の御言葉です。つまりカナン先住民は巨人である、ということです。そしてそれはネフィリムに由来しているといっています。もちろん偵察隊が怯えて、カナン先住民が大きく見えただけということもあるかもしれませんが。しかしここでは巨人といっただけの体躯の大きな者たちがいたのでしょう。

ネフィリムとは、巨人のいわば原型的存在です。創世記 6 章 4 節によれば、「神の子らが人の娘たちのところに入って産ませた者であり、大昔の名高い英雄たちであった」といわれています。イスラエルの民が、異常な大きなと異常な力を持つ民に直面したとき、その異常さを、神と人間の区別という創造の秩序が破壊されているため生じたことであると理解したのです。神の栄光を求めることを知らない罪の力の具体的なかたちが巨人ということです。

そしてこの点、「ラファの子孫」も同じなのです。こちらは「レファイム(ラファの複数形)の谷」出身に居住していた者たちのことで、創世記 10 章 14 節によれば、カトフル＝クレタ島から出たペリシテ系の巨人です。つまりカナン先住民の中に巨人がいるだけでなく、海外から「約束の地」にやって来たペリシテ系の人々の中にも巨人もいるわけです。

そしてこれらの巨人たちの異常な大きなと異常な力は、両方とも、神の創造の秩序が破壊された罪の力の具体的な現れのことなのである、そのように聖書は見つめているわけです。そうしてみると、ダビデ軍とペリシテ軍との戦いの核心にあるのは、創造の秩序を破壊した者たちに対してダビデと 4 人の兵が勝利し、創造の秩序を回復したことにあります。そのため聖書は、戦闘の様子を細かく語る代わりに「ラファの子孫」と戦ったと強調していますし、またイスラエルの 4 人の兵は、いわばダビデ的存在として戦い勝利したと告げているわけです。

以上のことを箇条書きにまとめると次のようになります。

- ①15～17 節 疲れたダビデに代わって、アビシャイが、イシュビ・ベノブを倒す。

- ②18 節 フシヤ人シベカイが、サフを倒す。
- ③19 節 ヤアレ・オルギムの子エルハナンが、ガト人ゴリアトを倒す。
- ④20～21 節 ダビデの兄弟シムアの子ヨナタンが、六本指のラファの子孫を倒す。
- ⑤22 節 ダビデとその家臣が、ガトにいた四名のラファの子孫を倒した。

Ⅱ. サムエル記下 21 章 15～22 節の解説

【15 ～17 節】

「ペリシテ人は再びイスラエルと戦った。ダビデは家臣を率いて出陣し、ペリシテと戦った」とあります。この部分は、これまでと同じく、戦争の記事の始まりを告げています。しかし聖書は続けてすぐに、「ダビデは疲れていた」というのです。ダビデはこれまでのように出陣し、家臣団を指揮しつつ、自らも戦うことがもはや出来ない、ということです。何故か。それは、おそらく老化のためではないでしょうか。

しかもそのような時、「ラファの子孫の一人イシュビ・ベノブは、三百シェケルの重さの青銅の槍を持ち、新しい帯を付けて、ダビデと討つ、と言った」わけです。300 シェケルは、1 シェケルが 11.4 g ですから、3,420 g であり、約 3 kg 半の重さです。当時槍は 1 kg～2 kg といわれますから、かなりの重さです。それを操るのですから、ベノブの力は相当なものであり、彼にはダビデを倒す自信もあったのでしょう。ちなみに、オリンピックの投げ槍は、男子の場合、長さ 2.7m、重さ 800 g と決まっているそうです。ともかく、これはダビデを一騎打ちに誘い込むものでもあったかもしれません。

しかしダビデの姉ツェルヤの息子アビシャイは、ダビデを助け、またダビデに代わって、このペリシテ人を打ち殺したというのです。その時、アビシャイをはじめダビデの家来たちは、ダビデに対して「以後、我々と共に戦いに出てはなりません。イスラエルの灯を消さぬよう心掛けてください」と誓わせています。ダビデは、家臣団にとって、さらにイスラエルの民全体にとって、「イスラエルの灯」というべき存在だからです。それは、ダビデ自身、感謝の歌の中で次のように歌っているとおりです。サムエル記下 22 章 29～30 節には次のようにあります。

「主よ、あなたはわたしのとし火
主はわたしの闇を照らしてくださる。
あなたによって、わたしは敵軍を追い散らし、
私の神によって、城壁を超える。」

ここに歌われているとおり、「主なる神がわたしのとし火である」という信仰があるので、ダビデは「イスラエルの灯」なのです。したがってまた、そのようなダビデに代わって戦うことは、ダビデの信仰を受け継ぐということでもあります。つまり主の戦いに参加して戦うのです。こうしてこれ以降の戦いでは、ダビデの家臣が戦いますが、彼らはダビデの信仰の継承者であり、あたかもダビデ自身が彼らにおいて戦っている、ということが出来ます。

【18～19 節】

その後、「ゴブの地」で戦闘がありました。ここでも、戦闘の様子は語られず、ただフシヤ人シベカイという家臣が、ラファの子孫の一人サフを撃ち殺したといわれるだけなのです。

再び「ゴブ」で戦闘があったときには、ベツレヘム出身のヤアレ・オルギムの子エルハナンがゴリアトを打ち殺したとあります。そこである人は、この記事が本来のものであって、少年ダビデ

がゴリアトと戦い勝利したというのは創作ではないかといっています。以下でこのことをめぐって四つの意見を紹介しておきます。

- ①歴代誌上 20 章 5 節には「ヤイルの子エルハナンがガド人ゴリアトの兄弟ラフミを打ち殺した」とあります。だから少年ダビデがゴリアトを倒した記事は創作ではなく事実である。
- ②またベツレヘム出身エルハナンは、同じくベツレヘム出身ダビデが王に仕える以前の名前であったというわけです。それが、少年ダビデのゴリアト退治の伝承へと遡って発展した。
- ③ダビデの四人の家臣のラファの子孫である巨人退治の伝承が、遡って少年ダビデによるゴリアト退治へと流用、展開していった。
- ④少年ダビデによるゴリアト退治は創作である。エルハナンがゴリアトを倒したのである。

以上の四つの意見は、どれも「少年ダビデのゴリアト退治」が歴史の事実かどうかをめぐって議論しているわけです。従ってまた、聖書を歴史資料に分解して見つめているわけです。

しかし聖書自身は、一般の歴史書や年代記のような関心から語られていません。聖書は、ダビデに見られる神信仰が、ダビデの家臣たちにも受け継がれている、ということを告げようとしています。ここではエルハナンがいわばダビデ的な存在として戦っています。つまりダビデが疲れて戦うことのできなくなった後も、ダビデの信仰を受け継ぎ、ダビデ的な存在が敵を打ち破ってイスラエルを守ったのです。

【20～21 節】

ここでは「ガト」での戦闘が語れています。前の記事と違って敵の名前が書いてありません。その代わり「ラファの子孫で、手足の指が六本ずつ、合わせて二十四本ある巨人」とわれています。わたしたちは、ここで初めて巨人の姿形の一端に触れるわけです。手足の指がそれぞれ六本であったとは、今日「多指症」と呼ばれ、病気に分類されているわけです。

しかし聖書は、そういう見つめ方をしていません。巨大な体躯を支えるのに、六本の指がある、あるいは六本の指があるほど巨大である、という見つめ方をしています。そしてこの異常さは、神の創造の秩序が破壊されていることを指すものでした。そのような「ラファの子孫の一人」を、ダビデの兄弟シムアの子ヨナタンが討ち取ったと告げています。以前、ふれたようにダビデには、エリアブ、アビナダブ、シムア(シャンマ I サム 16:9)、ネタンエル、ラダイ、オツェムの兄弟がいました(歴代誌上 2 章 13～15 節)。その三男シムアの子ヨナタンが、「疲れたダビデ」に代わって戦い、勝利したわけです。

【22 節】

こうしてまとめの 22 節では、ダビデ軍とペリシテ軍の戦いについて、特に「これら四人はガトにいたラファの子孫で、ダビデとその家臣の手によって倒された」といっています。つまり一般の戦記物のようにダビデ軍の大勝利やダビデの兵の武勲といったことではなく、神の創造の秩序が破壊されることで生まれた「ラファの子孫」たちに勝利したのであって、まさに罪に対する神の勝利を告げているのです。

こうして聖書は、ダビデの王国がただ地上に領土を持つだけの国家ではなく、まさしくそれによって神の御支配をもたらす霊的な共同体であることをも証ししているのです。このことは、後にダビデの子イエス・キリストの永遠の王として神の国を創設することへと展開していくのです。